エゾマツ

北海道ボランティア・
レンジャー協議会
エゾマツ11号
平成元年10月 9日

発行責任者　河村千束

秋に思う

北海道ボランティア・レンジャー協議会々長
河村　千束

オオルリが鳴く緑濃き森に、コンロンソウ、ホウノキ、ミズナラなどの白い花が競って咲き乱れていたのもつい先日のことであった。

台風が過ぎ去ったあと、あの強い日差しが続いていた北国の八月は急に秋涼となり、人々を野に山にそして森へと誘う。

アカシヤをはじめ、ホザキナナカマド、シナノキなど晩春から初夏にかけて白い花が咲くのは何故であろう。このようなややもすれば見逃しがちな自然の移りかわりには深い理由があると思う。それにしても最近四季折々に自然を考える人々が多くなりつつあることは喜ばしいことである。

梅雨のない北海道の季節の移り変わりは直線的である。美しいサビタの白い花、黄色いキンミズヒキの花から、ススキ、オミナエシ、キキョウへと夏草から秋草へと移り変わっていくなかで、小暗い森の中には、サラシナショウマの白い花が咲き、明るい林地にはヨツバヒヨドリが咲く。それと前後してキツリフネソウ、オオハンゴンソウをはじめ、ハチジョウナ、コウゾリナなどの黄色い花が目立ってくる。そして林道沿いに紫紅色の花をつけるエゾトリカブト、ホソバトリカブトも色を添える。またうす紅色のツルニンジンが咲いて森に彩りを添える。

やがて秋の深まりとともに、草の実、樹の実が色づきはじめ、森は燃えるような紅葉の時期を迎える。そしてこの晩秋の美しさを求めて、人々は日本的感情に浸るため森へと足を運ぶのである。

賑々しい春の花の楽しさに対し、秋のそれは心に滲みるいとおしさを人々に与えてくれる。日本の風土の多様性を痛感せざるをえない。その風土の美しさを私達の祖先は生活詩としてうたってきた。そして生活との密接な関わりの中で一つ一の生物に名前がつけられていったのであろう。

今日自然との接し方に色々な方法があるが、私は素直に、あらゆる角度から自然に接し、その巧みさ、不思議さ、複雑さを私なりに、総ての機能を働かせて、面白く楽しさを求めていき、人と自然との深い係わりを見つめていきたいと思っている。それが自然観察の楽しい出発点だからである。

保健環境部自然保護課
元年.11.-1 収受
第　　号

第４回総会に出席して

鈴木広司

このところすっかり日も短くなり、庭の菊の花も色とりどりに咲き始め、山の木々もそろそろ色ずきを見せる頃となり、雪の便りも間近いことと思います。

さて、７月８日・９日に亘り札幌市定山渓において開催された「第４回北海道ボランティア・レンジャー協議会」総会に、第３期生の私として始めて出席したわけですが、今年は札幌市郊外ということもあってか、出席者は地元会員のみで他地域よりの出席者はなく、多くの話を伺うことが出来なかったことは本当に残念でした。

総会は予定どおり午後５時大友副会長の司会により開会され、議長選出の後会長挨拶、さらに 道自然保護課 沼田保全係長よりのご挨拶を頂戴し、昨年度の事業報告を始め、平成元年度事業計画案など７議案について熱心な討議がなされました。

そのなかで最も論議の中心となったことは、新事業計画及び、予算案に関連して組織の拡充と、各種行事への積極的参加という問題であったと思います。

特に、会の基幹ともなる組織問題につきましては、予算面その他諸々の困難な事情もあるなかで、会発展のため大いに意見を交わしたところでありますが、時間の関係もあって具体的な良策を見出すまでには至らなかったものの、それまでの論議の内容を集約すると、会員相互の信頼と融和のもとに一層連携を深め、誰もが親しみやすい会の運営を図ることが必要ではないか、ということであったと思います。

また、最近地方会員の一部から要望のある支部機構問題でありますが、今後会が大いに発展する上にも、また昨年「協議会」と改称した経緯からも今後は多くの意見要望を伺うなかで検討を重ね、組織の充実を図ることとなりました。

このほかの問題としては８月下旬開催される「第４回ボランティア・レンジャー育成研修会」には会として、研修生との話会いの場を設けてほしい旨道に要請し、それには会長が出席して各地での活動状況や、組織を通じて諸行事への参加を呼びかけるなど、組織拡充に努めることとなりました。

最後に会の円滑な推進を図るため会則の一部改正（専門部の事務分掌）を行い、これら議案を一括承認し、会員の一層の理解と協力により本協議会の発展に努めることを確認し、議事は終了しました。

翌日は９時頃より近くの初雪沢周辺の歩道を全員で歩き、野草の観察を行いその後は建設されて間もない定山渓ダム周辺を眺望し、総会は総て終了し午後解散しました。

今回始めて総会に出席して思ったことは、いろいろと制約のあるなかでの活動の在り方、難しさ等々多くのことを感じた次第であります。

ボランティア・レンジャー実践セミナーに参加して

竹本　幹彦

去る6月16日（金）より6月17日（土）の2日間、「支笏湖野鳥の森」を中心に実施された。参加人員は、過去三回のレンジャー育成研修会の修了者が全道各地より二十余名が参加していた。

その内容は16日午前中に、講義「水生昆虫について」は伊藤富子講師、同じく「森林、樹木について」斉藤新一郎講師、同じく「植物、薬草について」山岸喬講師、同じく「セルフガイドブックの作成」は大畑孝二講師であった。

セミナー参加以前は、日常周辺で見る自然を意識していた。それは、咲く花、鳴く鳥、風になびく木々であった。今回、新しく自然の大きさ、広さ、深さを教えられたのは水生々物であった。

川には「ふな」や「ウグイ」「アメマス」等の魚よりいないと思っていたが、実際はもっと沢山の生物がいることがわかった。川に住む鳥も多く「カワガラス」「カワセミ」「コヨシキリ」など、川にやってくる動物も「イタチ」「キタキツネ」「タヌキ」「エゾシカ」等、川原の植物は「ヨシ」「ススキ」「オオヨモギ」と多い。

川の流れは自然の流れにもたとえられるが、浅く流れが速い「瀬」、深く流れがゆるやかな「ふち」がくりかえされ、蛇行が多い上流で、水生生物がいる。「ヘビトンボ」「ヒラタカゲロウ」「ユスリカ」「ブヨ」「マダラカゲロウ」等である。

17日の野外実習では、こうした川とはちがった幅の狭い小川であった。しかし、そこに共通しているものは、非常にきれいで澄んだ水であり、汚れていないのが住める条件であった。調べ方は非常に目の細かい網を動かす石の下流において、石を動かして、石と石のすきまにいる虫を受け、バットにいれて観察する。

砂や泥にもぐっている虫は、川底を手やザルで掘砂や葉といっしょに虫をボールに入れる。川に住む「カワゲラ」「カゲロウ」等によって、汚れているかいないかをある程度判断することができる。汚れた川には「シマイシビル」「サカマキガイ」「ミズムシ」等で、ひどく汚れた川には「セスジユスリカ」「イトミミズ」等がいる。

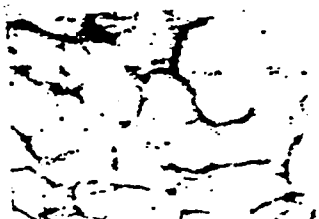
このように川は自然界にとってきわめて貴重な存在といえる。従って汚すことなくいつでも上流、下流ともに、ごみもなくきれいで虫も魚も住み、生態上バランスがとれた河川であってほしいと思った。

カムイ・ミンタルの謎

山上　光一

今年は大雪山に登る機会が四度ほどあった。ここはアイヌ語でカムイ・ミンタル——神々の遊ぶ庭—— と呼ばれている。しかし — 魔物の住むところ — とも言われている。この二面性はとても面白いと思う。「神のみわざは何処に現れているのだろう？」「魔物の仕業は何処にあるのだろう？」と自分なりに意識して登っている。しかし、どう考えても私の浅い知識と知恵ではとうてい解決がつかない難問がたくさんある。会員のみなさん、どうか謎が解けたらご一報下さい。

① 雪田の上をみると紋様が、ある法則性を持って網目状になっている。なぜだろう。



夏の森林観察会に参加して思う

札幌市　　関　廣司

8月20日、野幌森林公園「夏の森林観察会」に参加した。直後に遠方に旅行する仕事もあったので、参加をとまどっていたが、今年は是非とも四季の観察会は必ず出るようにしようと思っていたので、出掛けてみた。

春の月例会のとき、環境週間の観察会では瑞穂連絡線を辿ったが、このたびは大沢口を出発点とし、四季美コース、桂コースの道筋であった。

初めに森林公園の管理部長さん、ボランティア・レンジャー協議会の会長さんから歓迎の挨拶を頂き、早速、夏の野の花、樹々の姿を求めてコースを巡った。

あらかじめ貰った解説のプリントでは「今咲いている公園内の花」として、凡そ30種ほどがあげられていたが、初めて名前を聞くものも多く、また先日北大の植物園を見て廻った折りに見た野草の種類と随分異なるように思われた。いざとなると野草の種類の多さに驚く。

この日、私達のグループが道々確かめた植物の数は約70種（木本17種を含む）にも達した。その中には春以来の観察会などでお目にかかった種類もそちらこちらにあり、久し振りの御対面といった気持ちで心が和む。

それにしても指導者の皆さんはよく植物名を覚えておられるし、心をひきつけるような楽しいお話しをされる。参加した皆さんが、今日は来て良かった。そしてまた来たいという心を持つように努めてとられることがよく分かるのである。参加者の中には物知りの方や、学問的素養のある方もおられるので、自然解説のボランティアの活動は、卒直に言ってなかなか難しいものにも思われる。色々と工夫のいるところであろう。

今年は機会に恵まれたので、探鳥会や、自然保護をベースに据えながら、山登りを月例的に行っている団体などの山行きにも加わってみた。どの集まりも自然を愛し、見つめ直そうとしている人達が多いのに驚いた。生活のゆとりが、人々を自然へと導くことは当然であるが、そこには物質万能の身辺からかけ離れた自然のたたずまいに憧れる心、素朴な気持ちがうかがわれる。そして、近年とりわけ地球のいたる所で破壊が進行しつつある自然への関心にも深いものがあるように思われるのである。グループによっては、こうし方面についても専門家の話を聴きながら学習をしているようであり、私も少なからず考えさせられるものがあった。道ボランティア・レンジャー協議会でも色々と研修の機会を設けて実行されるようにうかがっている。私も出来るだけそうした機会に参加し、多面的な見聞を広めたいと思っている。また、ボランティアとしての協議会の仕事は、これから益々必要性が高まるものでなければならないと思う。これまでの一般社会人を対象とした活動をベースとして、さらには学校教育や、青少年の野外活動の分野にも期待されるものがあると思うのである。狭い家庭や学校の中に閉じこもってビデオゲームなどに熱中している子供達が多いと聞くにつけ、豊かな自然の中での体験をさせることが、人間形成上、いかに大切なことであるかを多くの大人は考えていると思う。野幌森林公園に時々出掛けてみて、小学生や幼稚園児たちの野外活動で訪れる姿もしばしば見掛ける。そうした人達にちょつとしたガイドや解説をしてやれば違った目でものを見、新しい知識が得られ、自然に親しむきっかけになる人が多く生まれるのではないかと思ったりするのである。

② 比較的堅い雪田の上を見ると紋様がスプーンカットになっているところがある。この原因は何だなうか。

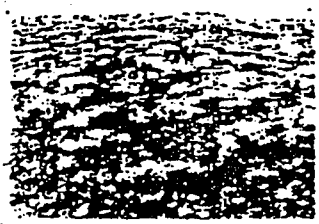
③ 雪渓の上に１時的に水が流れ、川が出来て土砂を運んでいる。この様な現象は何時、どのような条件の下で起こるのか。
（裾合分岐に行く途中）

④ 水溜まりの跡が乾燥すると土砂が捻じりアメ状になる。どうしてこのような状態になるのだろうか？
（裾合分岐に行く途中）

⑤ チシマザサの群落から地下茎が８～９メートル伸び出している。そうするとここにある百平方メートトルもある群落はもともと１本から成り立っているのでないか。

⑥ 火山弾を見ると割れ目の筋が一定の法則性をもって通っている。柱状節理ができる理論と関係あるのだろうか？（裾合分岐に行く途中の２つめの沢）

⑦ 熊岳の火口横の雪渓が融け出していた。雪渓の中に黒いリングが出来ていた。何故だろうか。



⑧ 傾斜面で礫が多くしかも風の強い所では礫と高山植物（ヒース）が交互に位置している。何故こうなるのだろうか。
（間宮岳から中岳の間）

ここに掲げたのは７月26日にカムイ・ミンタルで見られた現象です。この謎が解けましたらご一報いただければ幸です。ここに記載できなかったその他の謎は後日機会をみて発表させていただきます。

1本の苗木

住吉　光子

戦時中、植林をした記憶がある。それは何処であったか、どのような設定の中で行われたか定かでない。はっきり覚えていることは、この苗木が何年か後に大木になるということに大きな期待をもっていたことである。「お山の杉の子」という歌が毎日のようにラジオで流れていた頃である。

つい最近、レンジャーの一人である野月さんの計らいで、思いがけずまたその経験をすることができた。粗削りの斜面に穴を掘り、根がいきづくのに障害になる大き石を取り除き、蔓っているささの根を引っ張り出す。用意した黒土を入れ苗木を穴に浮かすようにして入れ土をかける。土の乾燥を防ぐために辺りの枯れ木を集めて苗の周りに置く。こんな作業の中で私は何故か身体の底からふつふつ歓喜がこみ上げてきて仕方なかった。それは、我が家の庭に園芸樹を植えこむのとは全く違う喜びであった。この感情はどこからわいてきたものか、暫く考えたが今だに結論が出ない。話しは変わるが、昨今、「緑のオーナー制度」の紹介が盛んである。一口20万～50万円の出資で森を育てませんかというふれこみである。現在、全国でオーナーは約8 万人、出資総額は総額30億円に達しているという。この紹介が目につく度に私も是非一口位はと落ち着かなくなる。勿論、収益の目的の為としては、これ程馬鹿らしい投資はないことは目に見えている。しかし、誰もこの区画については伐採することができず「緑」が保護されると思うと心豊かである。

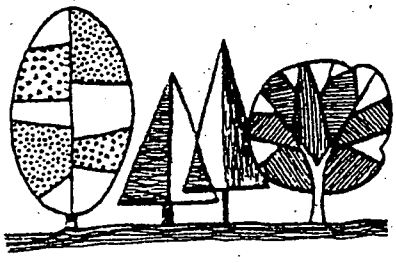
今地球上では、一分間に甲子園球場の10倍の広さの森林が消えているという。この事は近い将来に、いろいろなかたちで地球規模の大災害をもたらすことになるだろうと報じられている。自然を思いのまま加工するという工業的発想が、人間の驕りが、人類を滅亡させることになるだろうと言う人もいる。

遅ればせながら日本でもあちらこちらで、「緑の町づくり」を提唱しはめている。
自然観察を通して自然に対する畏敬の年を呼び戻そうという運動もさかんである。

そんな中で、今、私に出来ることは何かと考える。野山を歩きながら森の大切さを語るのもよいだろう。たった一週間しか咲いていない可憐な野の花を共に愛でるのもよいだろう。

恥ずかしながら今、私は植えた一本の苗木の成長の過程で、小鳥や、虫や小動物達が生活し、自然のリズムを奏でると思うだけで、幼い頃植えた苗木に託した期待と重なって、夢は膨らんでいくのである。

一本の苗木を植えることを通して、忘れていた昔を思い出し、また遠い未来を夢見ることを与えてくれた野月さんの行為に感謝してお礼を申しあげたい。



樹木の不思議

―――― 年輪はどうしてできるか ――――

大友　建

山を歩いて疲れると、木の切り株に腰掛けて休むとき、ふときれいな木目の入った年輪にしばし手を触れるときがあります。

幹は、樹木の枝や葉を支える以外に、根や葉によりつくられる養分を、上方、下方に運ぶ大切な管をもっているのです。

太い幹には、子のような管が、いっぱいにつまっております。

水を運ぶくだを導管と呼び、デンプン質の砂糖分を運ぶ管を師管と呼んでいます。

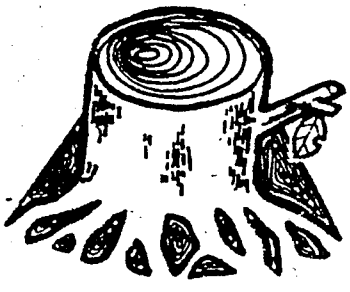
これらはいつも細胞分裂を行う部分から作られ、導管は幹の内側に向かって増え師管は形成層から、幹の外側に向かって増加していきます。

導管も師管も毎年毎年つくられているので、幹の内側は古い導管でいっぱいです。私達がみている木材の大部分は、主としてこの導管が残ったものです。

師管の方も毎年つくられ、一年ごとに死んでいき、死んだ管は幹の外側に押し出され、大部分が樹皮です。従って樹皮はむかしのなれのはてと言えるるしょう。導管の方は材として増え、幹を太らせます。一本の輪になっていい年輪は、一年間の導管の成長の跡を現しています。

然し、年輪は世界中どこでも、一年に一本増えるわけではなく、気候条件が影響している。気温、湿度に左右され、葉や、枝がよく成長している時に茎が太くなり、葉や枝の成長が止まると黒い輪ができ年輪がかんせいするということになり、条件変化により、成長状態に異常があるようなときは、不鮮明な年輪となり、このような年輪を偽年輪と呼びます。

よく南向きの方には、幅の広い年輪ができるといいます。植物ホルモンの一種であるオーキシンが、南向きの枝の葉や芽で、たくさんできること当然と言えそうです。



第４回ボランティア・レンジャー協議会に参加して

木村　万治郎

この度、入会させていただきました。よろしくお願い申し上げます。

この七月、二泊三日、旭岳温泉で開催された第四回ボランティア・シンジャー育成研修会に参加し、旭岳中腹では、見事な高山植物の花ばなが咲き誇る群落に歓喜を覚えた。

豊富な高山植物がつくりだす、広大華麗なお花畑。真夏にも大きく残る雪渓や雪田。あるいは溶岩大地に高層湿原として発達し、そこに点在する大小多数の池沼。

７月と８月の２ケ月間、低温の世界、それに吹きっさらしで風当たりが強く、養分のない土砂や岩地。夏になると一転して、直射日光の強い、水分の蒸発がはげしく、こうしたきびしい条件のなかで必死に身を守る根はものすごく深く、からだの何倍もの根をはわせて水分の補給を受ける。

春の遅い北海道ではウメ、サクラ、モモがいちどに咲くので見事だとよくいわれるが、高山ではさらに花期がぐんと短縮されるため、絢爛たる景観がくりひろげられるわけだ。

エゾコザクラ、チングルマ、ミツバオウレン、コケモモ、ハクサンイチゲ、ミヤマキンバイ、ガンコウラン、ウラジロテテカマドなどなど。

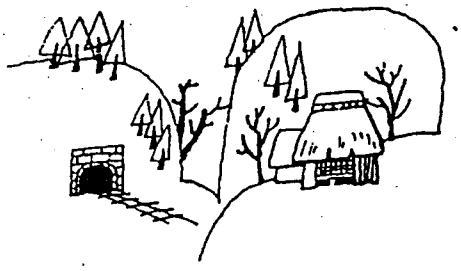
私達のすんでいる北海道は、豊かなそして優れた自然に恵まれており、北国にしか見られない沢山の動物や植物が息づいている。

このような自然は、先人たちが私たちにのこしてくれたかけがえのない財産である。ところがこの高山植物も心ない者たちによって盗掘が絶えないときき誠に残念である。

８月、夏の森林観察会の案内を受け野幌森林公園へ。大沢口で知人のＢ氏と会う。白杖を頼りに日曜毎に東区から来られるとのこと。氏は「公園入口のバス停に降り立つと、札幌市内の空気とは一変して、とても美味しい空気だと判ります。森林によって浄化されるのでしょう」「園内を歩くと、身も心も清々しくなり、とても楽しみです」「目の不自由な人の入園が年々ふえています」と話されていた。

時あたかも、全国障害者スポーツ大会が札幌で開幕される。これからは、森林公園も身障者の人が容易に利用できる施設になるであろう。

我々、一人ひとりが、自然の役割やその尊厳を考えて、美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えなくてはならないと思う。



新会員の声

長田　和子

私は、７月に旭岳温泉で行われた研修会に参加し、協議会に入会させて頂きました。

研修会では、参加者のみなさんとは初対面のはずなのにとても親近感がありました。自然に興味があるという共通項のためでしょうか。講師の方々も、個性的で素晴らしい方ばかりで、参加することができて本当に良かったと思っています。

私はずっと留萌で育ちましたが、高校まで暑寒別岳がどの山なのかを知りませんでした。とても恥ずかしい話しですが、それくらい周りの自然環境に無関心だったのです。大学で始めて自然と触れ合う楽しさを知りました。

興味を持ってしまうと、世界が変わりました。野山の雑草は、もう雑草でなくなり、各々人格（草格？）をもって身近にせまってきました。それまで、気づきもしなかった小さな花が目に入ってきました。そして草花を手折ったり、海や山にゴミを捨てる事ができなくなりました。

私がそうだったように、自然と触れ合う機会がなかったために無関心だったり、野山歩きを嫌う人は多いのではないでしょうか。より多くの人に親しみ、楽しさを知ってもらいたいと思います。

これまで具体的な活動をしたことのない私ですが、今後よろしくご指導お願い致します。

ＮＨＫ　ＢＳ　サマースペシャル
北国からのメッセージより

ぼくらはみんなトムソーヤ

むかし子供はトムソーヤだった
小刀を持って森の中に入り　親の目をかすめて川に飛び込んだ
見るだけの川と　飛び込んだ川は「オー」と思うくらい様子が違っていて
急流に流されたり　流木に張りついたり
時にはとんでもないパニックに襲われたりする

そうして必死に知恵をはたらかせ　力をふりしぼって生還できたとき　僕らは一つ心の歳をとる

得難い知識と自信という名の新たな年輪を重ねたものだった

自然は親だった　自然は教師だった　自然はいつも　厳しく　優しい　そて美しい教室だった

ぼくらはそこからすべてを学んできた

いつの頃からか大人たちは　この自然を遠いものとして見つめるようになってきた　こどもたちがそこに近づこうとすると「危ないからおやめ」と禁じるようになった

そして　その代わりに　本とかテレビとか　見ているだけで　危なくないものを本物の代わりに　彼らに与え　それが自然だと説明しはじめた

匂いのない自然　風のない自然　触れない自然　危険のない自然
ガラスの向こうの絵はがきの自然

トムソーヤはこの国から消えてしまった

今　この国に育ちつつあるのは　触れもしないで綺麗とか　知識ばかりをふりかざす人の群れ

砂上に築かれた楼閣の上で　出世や　金儲けや　家や　メンツを　倒々として志向し大事がる人々

汗を流さずに　人が一生を送れるものだと錯覚した人々

僕はふと　近頃考えることがある

地球を守っている環境の元素には　人の汗だって入っていたんじゃあるまいか

―― 倉本　聡 ――

※　ここに掲げたものは８月４日（金）に、ＮＨＫ衛星放送で放映されたナレーション（エッセイ）を文章にしたものです。

新会員の声

自然観察は安全で楽しく

余市町　　簾内　道夫

7月19日から3日間、旭岳温泉大雪国立公園を会場に行われた第四回ボランテイァ・レンジャー育成研修会を44名の方と受講しました。その席上で河村会長さんから協議会加入の呼びかけに、早速入会をさせていただきました。

今、国民のなかに「みどりの日」制定とともに、自然のなかに、やすらぎとうるおい、心の豊かさを求める声が高まってきました。このことから自然に親しんでいただき、自然を守っていくために、自分の勉強を含めていくらかでも役に立ちたいと思いますのでよろしくお願いします。

北海道には素晴らしい自然が多くあります。河川、湖沼、青い海と景勝の沿岸、山岳、果てしなくつづく緑なす大地。数多くの動植物、四季折々の移り変わりと気候風土、秋の実り等が私達の生活と心を豊かに育んでくれます。

私達の町余市はニセコ・積丹・小樽海岸国定公園の中心で、近くの余市岳（標高1、488米）は道のすぐれた「自然景観保護地区」に指定されています。このような恵まれた自然環境の中にいると、素晴らしい自然の恩恵を忘れがちです。

みなさんもご存じの事と思いますが、余市岳頂上一体はハイマツ群落の枯死が広い範囲に及んでいます。これは今から15年前に山火事により消失したもので、一度失われた貴重な植物群落の回復には100年を要するとも言われています。

積丹岳でも数年前に同じような山火事が発生し営林局署、地元消防団、地域の皆さんと自衛隊のヘリによる3日間の消火活動でどうにか鎮火出来たと聞いています。どれもが登山者によるタバコの火の不始末と推定され非常に残念なことです。

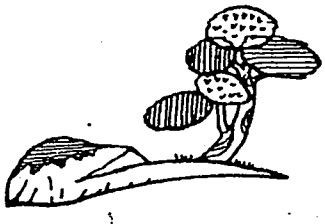
今年7月には旭岳でSOSの木の枝文字による遭難が新聞、テレビで報道されました。どんな計画と行動でも慎重で常に「自然観察は安全で楽しく」このことがボランテイァ・レインジャーの使命と考えます。これを心に決めてお手伝いをいたしたいと思います。

行事案内 ＮＯ１

○ １０月２１日（土）　会員研修会

札幌円山公園付近の原始林での観察会です。秋の深まりの中で、自然界の営みを楽しく観察しましょう。

集合場所　地下鉄円山公園地下鉄駅
集合時刻　１３：００
研修時間　13:00 ～15:30
懇親会　「宮の森ガーデン」 16:00～18:00 予定
　費用は2000円程度
講師　斉藤新一郎氏（北海道林業試験場緑化部防災科長）

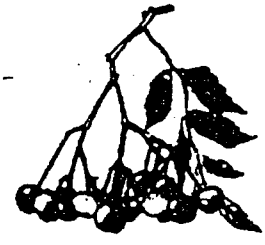


行事案内 ＮＯ２

○ １０月２２日（日）　野幌森林公園秋の森林観察会

野幌森林公園の樹々の美しい紅葉、そして木の実を中心に植物の観察をしましょう。
多くの会員の皆様の出席を期待しております。

集合場所　野幌森林公園大沢口
時間　9:00～14:30
持ち物　弁当　双眼鏡　図鑑など



ボランティア・レンジャーの活動に理解と協力を

広報部より　小山　賢一郎

会報「エゾマツ」は、発行以来11号となりました。会報は北海道ボランティア・レンジャー協議会の活動の実状をうつす「鏡」です。
さて、広報部の立場から申すのは僭越であろうかと思いますが、1期～3期の現会員の皆様、4期の進入会員およびこれから入会を考えておられる方々に次のことをお願い致します。

(1) 1～3期の現会員の皆様には、引き続き会員となられ（会費を納入いただき）協議会の活動をご支援くださるとともに、会報「エゾマツ」への寄稿をお願い致します。

(2) 4期の新会員（すでに14名が入会されました。「ありがとうございます。」）の皆様には、会報「エゾマツ」12号〔平成2年1月末発行予定〕に原稿をお寄せ下さい。

(3) 4期の皆様で、まだ入会されていない方々には、会報11号を手にされた機会にぜひ入会下さり、新会員の皆様と同様に会報12号に原稿をお寄せ下さい。

―― 会報「エゾマツ」原稿募集 ――

〔応募内容〕

・テーマ　：自由ですが、冬にかかわる内容はとくに歓迎します。

・原稿の長さ：400 字詰め原稿用紙4枚以内が目安（とくに制限はありませんがハガキに書ける程度の短文でも可）

・内容：自然に関するものは何でも可

自然の観察記録、観察会の報告、自然の印象、感想、意見、論説、図書の読後感想など様々な内容歓迎。スケッチ、図版、図案、地図、写真なども可

※　とくに、会報にまだ一度も寄稿されたことのない方々、地域の観察会の紹介、自然の紹介なども歓迎します。

・原稿締切・・・・・・11月30日（木）

※ただし、編集上とくにご注文のない場合は広報部の意向によって編集します。

・従来原稿は広報部からの依頼により書いていただく場合が多かったのですが、ボランティアの趣旨をご理解下さりどしどし寄稿下さい。

原稿の送り先

〒 063 札幌市西区福井1 丁目14番21号
北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局
広報部担当　小山 賢一郎 宛
TEL. 011-662-3346

会費の納入について

１～３期生で今年度の会費未納の方は、３０００円を同封しました振込用紙で下記宛にお送り下さい。

札幌市東区東苗穂６条１丁目８－２６
小竹 数博 ☎ 011-784-6251

郵便振替口座番号 小樽 ８－２１４４２
（加入者名　北海道ボランティア・レンジャー協議会）

編集後記

11号をお届け致します。今回は11名の方から原稿をお寄せいただき、ありがとうございました。編集する者として原稿がたくさんお寄せいただくことはととても励みになります。

ワープロを打たさせてせいただくことは、大変勉強になります。特に人格が滲み出ていて ― 自分の言葉で ―書かれてある文章にあいますと「ウーンなるほど」とうなりながら作業をしています。レイアウトとカットは前回のとは少し変えてみました。11号も回を重ねますとカットが「ねたぎれ」して困っています。どうかカットとして使えるものがありましたら、お送りいただてれば幸いです。

最後になりましたが、４期生のご入会をお待ちしております。

山上